源氏物語表白

安居院法師聖覚

桐壺の夕べの煙。すみやかに法性の空に至り。箒木の夜の言の葉は。遂に覚樹の花を開かん。空蟬の空しき世を厭ひて。夕顔の露の命を観じ。若紫の雲の迎へを得て。末摘花の台に座せしめん。紅葉の賀の秋の夕べには。落葉をのぞみて有為をかなしび。花の宴の春の朝には。飛花を観じて無常をさとらん。たま〳〵仏教に葵なり。

榊葉のさして浄刹を願ふべし。花散里に心をとゞむといへども。愛別離苦の理りを免かるゝ例なし。たゞすべからくは生死流浪の須磨の浦を出でゝ。四智円明の明石の浦に身をづくし。関屋の行きあふ道をのがれて。般若の清きみぎりに趣き。蓬生の草むらをわけて。菩薩の誠の道を尋ねん。何ぞ弥陀の尊容をうつして絵合にして。松風に業障の薄雲を掃はざらん。生老病死の身。朝顔の日影を待たんほどなり。老少不定の境。乙女子が玉葛。

かけても猶たのみがたし。谷打ち出づる鶯の初音も何かめづらしからん。鳧雁鴛鴦のさへづりには如かじ。籬にたはるゝ胡蝶の。唯しばらくの楽しみなり。天人聖衆の遊びを思ひやれ。沢の蛍のくゆる思ひ。常夏なりといへども。忽に智恵の篝火に引きかへて。野分の風に消ゆる事なく。如来覚王の御幸に伴なひて。慈悲忍辱の藤袴を着。上品蓮台に心をかけて。七宝壮厳の真木柱のもとに至らん。梅枝の匂ひに心をとゞむる事なくて。浄土の

藤の裏葉をもてあそぶべし。かの仙洞千年の給仕には。若菜を摘みて世尊に供養せしかば。成仏得道の因となりき。夏衣立居に如何にしてか一枝の柏木を拾ひ。妙法の薪となして。無始曠劫の罪を滅ぼし。本有常住の風光をかゞやかして。聖衆音楽の横笛を聞かん。恨めしきかなや。仏法の世に生れながら。家を出で名を捨つるみぎりには。鈴虫の声ふりすてがたく。道に入り飾をおろす所には。夕霧のむせび晴れがたし。悲しきかなや。

人間に生を受けながら。御法の道を知らずして苦界に沈み。幻の世を厭はずして世路を営まんこと。如かじたゞ薫大将の香をあらためて。青蓮の花房に思を染め。匂ふ兵部卿の匂をひるがへしては。香の煙の装ひとなし。竹川の水を結びては煩悩の身をすゝぎ。紅梅の色をうつして愛着の心を失ふべし。待宵の更くるを嘆きけん宇治の橋姫に至るまで。優婆塞が行ふ道をしるべにて椎が本にとゞまる事なかれ。北芒の野辺の淡雪と消えん夕べに

は。解脱の総角を結び。東岱の山の早蕨の煙と上らん朝には。梅檀の陰に宿木とならん。官位を東屋の内にのがれて。楽しみ栄えを浮舟にたとふべし。是もかげろふの身なり。あるかなきかの手習にも。往生極楽の文を書くべし。夢の浮橋の世なり。朝な夕なに来迎引摂を願ひ。南無西方極楽弥陀善逝。願はくは狂言綺語の誤をひるがへして。紫式部が六趣苦患を救ひ給へ。南無当来導師弥勒慈尊。かならず転法輪の縁として。之をもてあそば

ん人を。安養の浄刹に迎へ給へとなり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹 著
国立公文書館デジタルアーカイブ『源氏供養表白』